



コンピュータ科学におけるエスノメソ ドロジー研究の意義

秋谷 直矩¹ 山崎 敬一¹ 久野 義徳¹

¹ 埼玉大学

〔受賞論文〕

高齢者介護施設におけるコミュニケーションチャンネル確立過程の分析と支援システムの提案
秋谷直矩, 丹羽仁史, 岡田真依, 山崎敬一, 小林貴訓, 久野義徳(埼玉大学), 山崎晶子(東京工科大学)
情報処理学会論文誌, Vol.50, No.1, pp.302-313 (2009)

この研究は、エスノメソドロジー（人々の相互行為と相互理解の方法の研究：以下 EM）を専門とした社会学の研究者と知能ロボットを専門とした情報工学の研究者の共同研究である。

埼玉大学での社会学と情報工学の出会いは、2004年のウィーンの国際会議（CHI）であった。CHIの同じセッションに工学が専門の久野と社会学が専門の山崎の論文が共に採録された。それまで両者は同じ大学だが面識はなかった。国際会議の同じセッションに埼玉大学から二人同時に発表したということで、協力して研究を進めようということになった。

現在は、ヒューマンロボットインタラクション研究センターを設置し、ミュージアムや高齢者施設の研究とロボットやロボット車いすなどの開発を行っている。ミュージアム研究においては、CHI 2008において Honorable mention paper を受賞した。高齢者研究における今回の受賞を機会に、さらに研究を発展させていきたい。

共同研究においては、社会学の研究チーム・情報工学の研究チームが独立にかつ密接に協力した体制をとっている。社会学チームでは秋谷が高齢者研究のリーダーとなり、複数の高齢者施設でビデオ撮影を含むフィールド調査を行った。本研究を進めるにあたって、各施設の方々の協力に感謝したい。

システム開発における EM 研究の重要性は国内外で広く認識されるようになった。他方、開発という目的にのみ焦点化した研究を行うと、現場において最も重要な問題が見逃されてしまうという問題も近年議論になっている。そこで、私たちは次のように共同研究を行っている。まず、対象となるフィールドを深く理解するために EM 研究を行う。そして、そこでの調査成果をもとにシステム開発を行い、現場での適応をチェックする実証実験を行う。またそれに並行して開発期間中も EM 調査は継続し調査成果を積み上げていく。

高齢者介護やその支援という社会的要請に応えていくためには、高齢者施設の現場の詳細を知らなければならない。高齢者施設では、複数のケアワーカーと複数の高齢者が同じ場所に一緒にいる。またそこでさまざまなワーク（作業）を行っている。そうした場では、ケアワーカーと高齢者の 1 対 1 のコミュニ



図-1 ヒューマンロボットインタラクション研究センターにて（左より、小林、山崎、秋谷、久野）

ケーションがスムーズに開始できることが、大きな課題となる。

こうした視点は、システム開発にも重要な示唆を与える。というのも、実験室ではどのように実験設定をしてもコミュニケーションの自然な開始場面を見ることは難しい。しかし、ロボットがある人間とのコミュニケーションを開始できないと、そもそも多くの人のいる場でその人へのケアを開始できない。こういった、現場で自然に組織される人々の活動を明らかにし、システム開発への重要な視点を得るために、EM 研究が重要なのである。この受賞を機会に社会学と情報工学との文理融合的研究が広がっていき、有用な成果が生み出されることを期待する。

（平成 22 年 4 月 30 日受付）

秋谷 直矩（正会員） akiya0427@gmail.com

2009 年埼玉大学大学院理工学研究科博士後期課程修了。博士（学術）。日本学術振興会特別研究員を経て、現在埼玉大学研究員、立教大学兼任講師。専門は社会学、エスノメソドロジー、ワークプレイス研究。

山崎 敬一 BY106561@nifty.com

埼玉大学教養学部教授。博士（文学）。専門は社会学、エスノメソドロジー、CHI、ヒューマンロボットインタラクション。近著に「実践エスノメソドロジー入門」（編著有斐閣）、「美貌の完成（第 2 版）」（ハーパーベスト社）。

久野 義徳（正会員） kuno@cv.ics.saitama-u.ac.jp

工学博士（東京大学）。東芝、カーネギーメロン大学客員研究員、大阪大学工学部助教授を経て、2000 年より埼玉大学工学部情報システム工学科教授。コンピュータビジョン、知能ロボット、ヒューマンインタフェースの研究に従事。